

我をわすれて

たゝずめり」

われはいとひぬ

花のため

けにも恐れぬ

鳥のため

されど夏たつ

今日よりは

そのゆゑ風の

したはしき」

夜 路

小林つね

一、暗き山路にふみまよひ

便らむ路をたづねつゝ、

木かけ出ればあなうれし

燈火つゞく町の軒

二、なれぬ旅路にさまよひて

たよらむ方も白雲の

空飛ぶ星に誘はれて

はつかに見ゆる人の家

## 金剛石

なでしこ

萬物中最も高價なるものはなにぞ、と同は、われは金剛石と答へん。萬物中最も堅硬なるものは、と問は、われは金剛石と答へん。

この貴き金剛石は、初はいかなる處にあるか、といふに、あるは晶形をなし、あるは顆粒状をなして、鑽石又は稜巒石中に産し、又川底の砂礫の中にまじりて存す。さて、産地にて古來有名なるは、東印度、ボルネオ、ブラジルなどなり。

金剛石は、初よりうるはしき光をはなてるか。

いな、金剛砂もてみがきて後は、じめて光を放ち、寶石としての價を増すものなり。金剛石のたふとまるゝは、實に其光線反射の著しきと、光彩の美なるとよるといふ。其色は、無色透明のもの最

も純粹なり。其他、淡黄色、濃黄色、綠色、褐色、青色、紅色などさまざまあり。

金剛石は、そも何より成れる、といふに、純粹の炭素の結晶したるものなり。されば、烈火にあへば、蒸發して炭酸又は酸化炭素となる。今其成分よりいふ時は、石墨、石炭など、同じき元素より成れるなり。されども、一は結晶して無色透明、かつ堅くて萬物中の至寶たり。一は結晶體にあらずして、黒色不透明の廉價なる物たり。そのたがひ雲泥とは、かゝることをやいふらん。

金剛石の貴きことは、今さらいはんもなかり。寶物とし寶飾として、世界中最も名あるは、故英國女王のもちたまへりしものにて、そは重さは八匁ばかり、價は我千五百餘萬圓なりといふ。

あはれ、心なき石だに、其貴きことかくのごとし。

人にして、なすことなく、徒に此世を送らんには、石瓦にもおとりぬべし。つとめざるべけんや。實に小さき金剛石は、われらをいさめてかゝやけり。はげまざるべけんや。

金剛石は、かく貴きものなれど、其光はいたづらに得たるものにあらず、みがきて後にこそ光はいづれ。人もまたかくのごとし。かけまくも、我皇后陛下のおはん歌に、このことわりを示させたまへるは、いともありがたきこと、こそおぼゆれ。我身に光をそへ、父母の名をあぐるも、我身の光をすて、いたづらに此世をおふるも、おのもくくの心にあり。みがけや、人々、心の玉を。心に光る金剛石を。

我國には、金剛石を産せざれども、これにまさるものあり。そは外ならず、貴き寶の日本魂には

あらずや。あはれ、此魂は金剛石にもまして、堅き寶にあらずや。君を思ひ國に盡す國民のまごころは、實に無形の金剛石なり。よしや有形の金剛石、國內にみち／＼たりとも、日本魂なくば、いかで開明の代に此日本を進むるを得ん。世界の日本をして、鑛物界の金剛石たらしむるも、石墨たらしむるも、みなわれら國民の手にあるなり。つとめはげみて、世界の金剛石をみがけや國民。

金剛石といへば、まづ思はるゝは、かしこければ金剛石の御歌なり。こを心の中にくりかへしつゝ、こよひしも筆をとりぬ。寶石のことを書かんには、玉のことき文こそよけれ、とは知れど、書をへてよみかへすに、瓦にもおとるをいかにせん。光のかたはしだになきをいかにせん。されども、ところ／＼に記したる金剛石の三字は、文の

光なきをおほひやせん、とたのみてかくなん。

明治三十四年五月二十八日 皇后陛下御誕辰に當りて記す

### むだがき

うの花

五月雨の、ふりみ降らすみ定めなく、我宿にのみとぢこもり居て、文机に向ひ、ものゝ本よむとはなしに、古き反古など取出し見るまゝに、去年の今日、友よりおこせたる文をなん、見出しける、なつかしさに、そが寫真とり出て、打見やるにまの當り相見ること、地して、いとうれし、されど今は遠く立別れ、相遇ふとの、難ければ、なつかしさ、いやまさりぬ。思へば幼きより、文よむこと、裁ち縫ふわざも、諸共にはげまし、はげまされ、手とり交して遊びしを、ゆくりなく、立ち